

# 万葉集2005番歌の「然叙手而在」の解釈について

竹生 政資<sup>1</sup>, 西 晃央<sup>2</sup>

## An Interpretation of the Fourth Phrase of the 2005th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

### 要 旨

万葉集2005番歌の第四句に「然叙手而在」という表現がある。注釈書によっては「かくぞ年にある」、「かくぞ離れてある」、「然ぞ年にある」、「然ぞ年<sup>しか</sup>にあり」などと訓まれているが未だに定訓をみない。「然叙手而在」は素直に訓めば「しかぞててある」であるが、これでは意味をなさないので第3字目の「手」を「年」の誤字と見なしたり、あるいは「手」を「干」（「離」の借訓）の誤字と見なしたりしてきた。しかし、この第四句は写本に異同がなく誤字が含まれている可能性はかなり小さい。

そこで本論文では、誤字説によらず元の原文「然叙手而在」のままで「しかぞててある」と訓み、「てて」を平安時代以降にしばしば登場する「とて」（「～と言って」の意）の原形だと考える。「とて」は古今和歌集などにはしばしば登場する基本語でありながら万葉集に一つも例がないのはきわめて不可解なことであり、この不可解さを解消するためにも万葉集では「とて」ではなく「てて」という形で現れていたと考えたい。実際「とて」を意味する「てて」が万葉集中ほかにも二例ある。また「てて」と「とて」は互いに音韻変変化形として理解可能である。

### 1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集2005番歌は、巻十の「秋の雑歌」に分類された歌のうち「七夕」という題詞をもつ98首（1996番歌から2093番歌まで）の中の一詩である。まず歌の内容（訓読文と原文と大意）を新日本古典文学大系本にしたがって掲載する[1]。ただし、第四句の原文については底本のままとした。

10/2005 天地と 別れし時ゆ 己が妻 かくぞ年にある 秋待つ我は

【原文】天地等 別之時従 自孀 然叙手而在 金待吾者

【大意】天と地が分かれた時以来、我が妻にはこのようにして一年の間逢えないことになっている。秋を待つ私は。

<sup>1</sup> 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

ここで問題となるのは原文の第四句「然叙手而在」の訓みと解釈である。ほとんどの注釈書は第三字目の「手」を「年」の誤字としたり、「干」（「離」の借訓）の誤字とする説をとっている。しかしこの句は写本に異同がなくすべて「然叙手而在」で一致しており、この中に誤字が含まれる可能性はかなり小さい。このほかにも従来の訓みと解釈にはいくつか問題点がある。

次の第2節ではまずこれまでの先行研究を見た上でそれらの問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解消できる新しい訓みと解釈を提案する。

## 2. 先行研究とその問題点

2005番歌の第四句「然叙手而在」に関する先行研究を見るために、まずこれまでに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈（第四句に関する部分だけ）を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

### ①新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

【訓読と現代語訳】「かくぞ年にある」と訓み、「このようにして一年の間逢えないことになっている」と現代語訳。

【注釈】第四句の原文は、諸本に「然叙手而在」とあるが、意味が通じないので、「手」を「年」の誤りとする童蒙抄の説に拠る。「而」字を「に」の仮名に用いた例、既出（一九九六）。「年にあり」は、意識すれば、一年の間在り続けての意。「年にありて今かまくらむぬばたまの夜霧隠（ごも）れる遠妻の手を」（二〇三五）、「年にありて一夜妹に逢ふ彦星も我にまさりて思ふらめやも」（三六五七）。

### ②新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

【訓読と現代語訳】「かくぞ離れてある」と訓み、「こんなに離れ離れに暮らしている」と現代語訳。

【注釈】原文「然叙手而在」とあるが、「手」は「干」の誤りとする説による。「干」はカ（離）レの借訓。「然」は普通、その（あの）ように、を表すが、時には、このように、の意に用いられることがある（六三一・二三二九）。

### ③講談社文庫（中西進）<sup>[3]</sup>

【訓読と現代語訳】「然ぞ年しかにある」と訓み、「このように年に一度しか逢えない」と現代語訳。

【注釈】逢瀬が年である。「あり」は陳述。年は原文、底本「手」、童による。

### ④万葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[4]</sup>

【訓読と現代語訳】「然ぞ年しかにあり」と訓み、「こんなにして一年をあり経て」と現代語訳。

【注釈】第四句原文「然叙手而在」とあり、元、類（三・二三）、紀に訓無く、西（朱）以後シカゾテニアルとし、代匠記に「然叙手ニ在トハ、我妻ト領ズルナリ」とあり、現代の諸家も疑を存しつつ、多くこの訓釈によられてゐる。しかし手を相携へてむつみ交してゐる世の常の夫婦乃至しのびづまならばさうも云へようが、天の河をへだてて年に一度の七夕女の交情を「手にある」といふ事はおちつかない。考には「然取手而在」の誤とし、新考には「然叙特而」の誤としたがいづれも穏やかでない。童蒙抄に「しかぞてにあると云ふ義歌詞にあらず。義も又如何に共通せず。宗師案は、手の字は年の字の誤字と見る也」とする説は、「■」と「■」|この二つは手と年の草書体であるが文字として表記不能|と草体はきわめて接近

してゐて誤字説としては最も認めやすい説である。但、「年と云ふは豊年の義也。稲をとしと云故、年なるとは豊年の事を云ふ也。稲の熟し調ひたる秋を待つと云ふ義也」とあるはむつかしすぎる解釈で、この年は、二〇三七、二〇五八 {歌は省略} など七夕の歌にいくつもある「年」は一年の事であり、二〇三五、十五・三六五七 {歌は省略} の「年にあり」と同じで、「一年をあり経て」の意にとれば極めて自然に解釈が出来ると思ふ。{以下略} (文中のカッコ {} 内は著者の注)

### ⑤日本古典文学大系<sup>[5]</sup>

【訓読と現代語訳】「<sup>しか</sup>然ぞ年にある」と訓み、「一年に一度逢うだけである」と現代語訳。

【注釈】このように一年に一度である。年は底本、手。年の誤りとする童蒙抄による。而をにと訓む例は一九九六にある。而は広韻に如之切。呉音では二の音となる。日本書紀にも嵯破而(さはに)(多に)、儂而(だに)(助詞)、阿那而恵夜(あなにゑや)(妍哉)の例がある。

さて上に示した五つの注釈書の問題点について検討することにしよう。第一の問題点は、上にあげた五つの注釈書がすべて誤字説によっていることである。第四句の原文は写本に異同がなくすべて「然叙手而在」で一致しており、この中に誤字が含まれている可能性はかなり小さい。

第二の問題点は、第四句の訓みと解釈である。上の五つの注釈書は第四句をそれぞれ「かくぞ年にある」、「かくぞ離れてある」、「<sup>しか</sup>然ぞ年にある」、「<sup>しか</sup>然ぞ年にあり」などと訓んでいるが、このうち「離れてある」という表現はほかに例がない。実際、「かれて」という表現自体は8例あるが、「かれて」に「あり」が続く例はなく、また「かれて」の前には「衣手かれて」や「妹が目かれて」などのように必ず「離れる対象」(「衣手」や「妹が目」など)が来ている。一方、「年にある」という表現は、確かに以下に示すように「年にありて」という用例が二つあるが、詳細に検討してみると問題がある。

10/2035 年にありて(年有而) 今かまくらむ ぬばたまの 夜霧隠れる 遠妻の手を

15/3657 年にありて(等之尔安里豆) 一夜妹に逢ふ 彦星も 我れにまさりて 思ふらめやも

この歌の「年にありて」の意味は、原義にできるだけ忠実に直訳すると「一年において」、「一年のうちで」、「一年の中で」などの意味である。すなわち「年にある」は「一年(の中)にある」という意味であり、この語自体には「一年に一度だけ逢う」という意味は含まれない。にもかかわらず、注釈書①、③、⑤は「かくぞ(しかぞ)年にある」と訓んで「一年に一度だけ逢う」や「一年に一度しか逢えない」などと訳している。このような解釈は「年にある」という語の本来の意味を大きく越えた意識といわざるを得ない。というのは、上の3657番歌に「年にありて 一夜妹に逢う」という表現があることから明らかなように、「年にありて」と「一夜妹に逢う」はそれぞれ別の意味をもつ言葉であり、「年にありて」に「一夜妹に逢う」という意味は含まれないからである。したがって、①、③、⑤は「然叙手而在」の「手」を「年」の誤字だと見なして「かくぞ(しかぞ)年にある」と訓んではみたものの、歌の言葉にない「一度しか逢えない」や「一度だけ逢う」という意味を無理に補足してやらないと歌の意味が通じない結果になっているのである。

一方、注釈書④は「手」を「年」の誤字とする点では①、③、⑤と同じであるが、訓みが多少異なり「<sup>しか</sup>然ぞ年にあり」と訓んでいる。ところが「ぞ」は係助詞であるから通常その結びは連体形「年にある」となるべきで、④の訓み方は異例である。実際①、③、⑤は連体形として訓んでいる。④は「年にあり」を「一年をあり経る」(一年間をあり過ごす)の意に解しているので、結句の「秋待つ我は」と意味がつながるた

めには第四句は連用形でなければ都合が悪く、あえて係り結びの法則を無視して連用形で訓んだものと思われる。

第三の問題点は、②を除く四つの注釈書が「而」を「に」と訓んでいることである。万葉集では「而」は「て」と訓むのが常であり「に」と訓む確例は一つもない。実際、万葉集には「而」の用例が1235件あるがそのうち1231件はすべて「て」（濁音の3件も含む）と訓んでいる（ただし助動詞「たる」を「而存」や「而有」と表記したものが6件あるが「てある」→「たる」の音変化を想定し「而」は「て」と見なす）。残り4件のうち1件は2033番歌「天漢 安川原 定而神競者麿待無」の第三句の「定而」であるが、この歌は難訓歌として知られており第三句以降はまだ訓みが確定していない。しかし「定而」の「而」は「て」と訓む可能性が高い。ほかの1件は2549番歌の第四句「木枕通而」であるが、そのまま訓めば「こまくらとほりて」と八音の字余りとなるため、通説では最後の「而」を無視して「こまくらとほり」と訓んでいる。残る2件は1996番歌の第二句「水左閨而照」と2005番歌の第四句「然叙手而在」である。後者については本論文において「而」を「て」と訓み第四句全体を「しかぞてである」と訓む新しい説を提案する。また前者の「水左閨而照」については、従来から訓み方に諸説あるが、本論文の姉妹編において「而」を「て」と訓み、句全体を「水さえててる」と訓む新しい説を提案する[6]。したがって、万葉集中の1235件の「而」の用例のうち1231件は「て」と訓み、残りの4件も「て」と訓む可能性があり、少なくとも万葉集においては「而」を「に」と訓む確例は一つも存在しないことになる。なお「而」を「に」と訓むことの問題点については姉妹編の論文を参照されたい[6]。

### 3. 新しい訓読と解釈の提案

前節の議論から、2005番歌の第二句「然叙手而在」の「手」を「年」や「干」の誤字とすることには疑問があること、「而」を「に」と訓むことにも大きな問題があること、さらそのように無理を重ねて「かくぞ年にある」、「かくぞ離れてある」、「然ぞ年にある」、「然ぞ年にあり」などと訓んでも文脈に合った自然な解釈が得られるわけではないことが明らかとなった。

そこで本論文では「然叙手而在」を訓読するにあたり、誤字説にはよらず、万葉集の標準的な訓み方に従って「而」を「て」と訓み、句全体を「しかぞてである」と訓むことにする。この場合に問題となるのは「てて」をどのように解釈するかであるが、この点については「てて」を平安時代以降にしばしば登場する「とて」（「～と言って」の意）の原形だと考える。その根拠については以下で詳しく述べることにして、まず結論を先に示すことにしよう。もし「てて」を「とて」の原形だとする考えが正しければ、2005番歌の訓読文と歌の大意は次のようになる。

【訓読文】天地と 別れし時ゆ 己が妻 しかぞてである 秋待つ我は

【大意】（この世界が）天と地に別れた時から、わが妻は、そんな運命だ（一年に一度秋にしか逢えない運命だ）ということになっている、（だから）秋を待ちます私は

第四句「しかぞてである」から係り結びの表現を取り除いて通常文に戻すと「しかとてあり」となる。さらにこの中の「てて」を平安時代以降の表現「とて」に置き換えると「しかとてあり」となる。「しかとてあり」の意味は、歌全体の文脈からすれば「そんな運命だということになっている」あるいは「そんな運命だと定められている」と解することができる。

さて、万葉集の「てて」が平安時代以降に登場する「とて」の原形である根拠について検討しよう。万葉集には「～と言って」を意味する「とて」という語は一つも見あたらない。これはきわめて不可解なこ

とである。というのは、万葉集の時代から約150年後の古今和歌集には「とて」が多数用いられ、歌の中だけでなく歌の題詞などにも多数用いられているからである。例えば古今和歌集の74、182、451、468、484、521番歌などに例があり、ほかにも多数ある。また土佐日記や竹取物語や源氏物語などにも用いられており、「とて」は平安時代以降の文献には頻繁に登場する古代日本語の「基本語」の一つなのである。にもかかわらず、古今和歌集の約4倍の歌数がある万葉集に「とて」という語が一つも登場しないのはなぜだろうか。実際のところ、万葉集では「とて」の代わりにその原形の「てて」が用いられていたのである。以下、その根拠を四つ示そう。

第一の根拠は、「てて」と「とて」の音が近く互いに音韻変化形として説明できることである。具体的な例をあげよう（丸カッコ内は原文表記、第一例の波線は後の議論で参照する）。

- 05/0800 ...うけ沓を 脱きつるごとく (奴伎都流其等久) 踏み脱きて 行くちふ人は (由久智布比等波) ...
- 15/3638 これやこの 名に負ふ鳴門の 渦潮に 玉藻刈るとふ (多麻毛可流登布) 海人娘子ども
- 古今集381 別れてふ ことは色にも あらなくに 心にしみて わびしかるらむ

上の例から、現代語の「～と言う」に対応する語は万葉集では「ちふ」または「とふ」、古今和歌集では「てふ」であったことがわかる。いずれも「といふ＝と言ふ」の音変化であることは疑いなく、「ちふ」、「とふ」、「てふ」は互いに音韻変化形だと考えられる。したがってこれらの例から想像して、「～と言って」を意味する「てて」と「とて」が互いに音韻変化形だったとしても不思議はない。ただし、「～と言う」の場合は「とふ」が万葉集、「てふ」が古今和歌集であるのに対して、「～と言って」の場合は「てて」が万葉集、「とて」が古今和歌集であり、「て」と「と」の関係が時代的に逆になっている。しかしここで大事なことは、「～と言う」や「～と言って」の「と」は、「て」や「ち」に音韻変化し得るという事実である。

第二の根拠は、もし「てて」を「とて」の意味だと認めるならば、前に結論として示したように2005番歌を第二句のみならず歌全体として無理なく解釈できることである。

第三の根拠は、以下に示すように、万葉集には「てて」の用例がほかにも2例あり、もしこの二つの「てて」を「とて」の意味だと認めるならば、この二つの歌を従来の解釈よりも無理なく理解できることである。

第四の根拠は、もし万葉集の「てて」を平安時代以降の「とて」の原形だと認めるならば、現代語の「～と言って」に対応する言葉が奈良時代から平安時代へと多少の音韻変化を伴いながらも「連続的」に存在したことの証拠となる。これに対して、もし万葉集の「てて」を認めなければ、平安時代以降に登場する「とて」は奈良時代以前にはまったく存在せず、平安時代に突如として生まれた言葉だと考えるほかない。しかし、「とて」のような「基本語」がこのように不連続的に生まれたとは考えにくい。

ところで、先に「とて」を意味する「てて」が万葉集中ほかにも2例あることを述べたが、以下それについて検討しよう。まず実例を示す（丸カッコ内は原文表記）。

- 05/0897 ...騒く子どもを 打棄てては (宇都弓々波) 死には知らず ...
- 20/4465 ...見る人の 語り次てて (可多里都藝弓氏) 聞く人の ...

この二つの「てて」はいずれも平安時代以降の「とて」、すなわち「～と言って」の意味に解するのがもっとも歌の文脈に合う。まず第一例（897番歌）から検討しよう。「うつ」は「捨（棄）てる」という意味の

下二段動詞である ([7]、pp. 121-122)。「うて・うて・うつ・うつる・うつれ・うてよ」と活用する。よって897番歌の「うつてては」の文法構造は「うつ+てて+は」で、「うつ」の終止形に「てて」が付き、さらに助詞「は」が付いたものと考えられる。平安時代以降の「とて」は終止形や体言に付くから、この「てて」を「とて」の原形だとする解釈とつじつまが合う。また「うつてては」の意味についても、もし「てて」が「とて」と同じだとすると、「うつとては」に置き換えることができるから、その前後の三句は「騒ぐ子どもを うつとては 死には知らず」となり「騒ぐ子どもを棄てると言っては死ぬこともできず」の意に解することができる。ちなみに897番歌は「老身に病を重ね、年を経て辛苦して、児等を思ふに及びし歌七首」と題する山上憶良の歌（七首）の最初の長歌である。この歌の大意は

命ある限りは病気などせずに安泰に暮らしたいのに、老いた我が身に追いうちをかけるように重病が加わり、辛苦のあまり何度も死にたいと思うけれども、無邪気に騒いでいる子どもたちを「棄てる」とては死ぬこともできず...

という内容であり、「てて」を「とて」と解すると文脈にぴったり合う。しかるに、従来はこの歌の「うつてては」はどのように解釈されてきたのだろうか。以下に、代表的な万葉集注釈書の現代語訳と注釈から関連部分のみを抽出して示す。

①新日本古典文学大系<sup>[8]</sup>

【現代語訳】 子供たちを、捨てたままでは死ぬこともできず

②新編日本古典文学全集<sup>[9]</sup>

【現代語訳】 子供らを 打ち捨てて 死ぬこともできず

【注釈】 打棄てては—ウツテは打ち棄（う）テの約。ウテはステの古形。

③講談社文庫（中西進）<sup>[10]</sup>

【現代語訳】 子どもを見捨てては死ぬことも許されず

【注釈】 打棄てて—打ち棄（ウ）テの約。下の「て」は接続助詞。

④日本古典文学大系<sup>[11]</sup>

【現代語訳】 子供を打ちすてて死ぬ気持ちにもなりきれず

【注釈】 打棄てて—打ち棄（ウ）テテの約。ウテはステ（棄）と同義。utiutete → ututete。

⑤万葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[12]</sup>

【現代語訳】 子どもたちを後に捨てて死ぬ事は出来ず

【注釈】 うつてては—打ち棄<sup>う</sup>てては、の約。「棄つ」を「うつ」と云つた事、前（八〇〇）に述べた。

上に示した五つの注釈書のうち①は注釈を記していないが、それ以外の四つはすべて「うつてて」を「うちうてて=打ち棄てて」の「ちう」が「つ」に縮約した結果だと説明している。この説明では「うつ（打つ）」と「うつ（棄つ）」の二つの動詞が複合した「うちうつ」という複合動詞の存在が暗黙の前提となっているが、果たして「うちうつ」（あるいはその縮約形「うつつ」）という動詞が上代に存在したのだろうか。

「時代別国語大辞典 上代編」と「岩波古語辞典」を調べてみたが「うちうつ」という動詞は存在しない。また「うちうつ」が縮約したとされる「うつつ」という語も「確例」としては存在しない。ただし、これまで通説として「うつつ」（あるいはその活用形）と解されてきたものに次の二例がある（今の978番歌は除く）。

- 11/2626 <sup>ふるころも</sup>古衣 <sup>うつ</sup>打棄つる人は（打棄人者）秋風の 立ち来る時に 物思ふものそ  
 11/2661 霊ぢはふ 神も我れをば <sup>うつ</sup>打つてこそ（打棄乞）しゑや命の 惜しけくもなし

しかし、ここに示された訓みは確例ではなく、2626番歌の「打棄人者」は「うちすつる人は」と訓み、2661番歌の「打棄乞」は「うちすてこそ」と訓むこともできる。その理由は以下のとおりである。

第一の理由は、このように訓めば確かに本来七音や五音の句が八音や六音となり「字余り」になるが、母音「う」が含まれているため歌の訓みとして許容されるからである。実際、万葉集には母音「う」だけを含み、かつ六音の句が「まくひをうち（真杭乎捨）＝真杭を打ち」（3263番歌）のほか134例あり、また同じ条件で八音の句が「のうへのみやは（努乃宇倍能美也波）＝野の上の宮は」（4506番歌）のほか45例ある。ただし、2626番歌の「打棄人者」は「うちすつる人は」と訓むよりも「うちつる人は」と縮約形で訓むのがよいかも知れない。というのは、「脱きつる」という似たような縮約例があるからである（前々ページの800番歌の波線箇所を参照）。これは通説では「ぬきうつる＝脱き棄つる」の「う」が脱落したものと解されているが、「ぬきすつる」（現代語の「脱ぎすてる」）の「す」が脱落して「ぬきつる」に縮約したと解することもできる。

第二の理由は、「うち捨てる」を意味する語として確例があるのは「うちすつ」だけだからである。「うちすつ」は上代語としては確例がないけれども、平安時代以降にはいくつも確例がある。例えば、源氏物語（帯木）に「しどけなく着なし給ひて紐などもうちすてて」とある（[13]、p. 170）。「うちすつ」は現代語の「うち捨てる」に受け継がれ現在でも頻繁に用いられている。なお「捨てる」を意味する上代語としては「すつ」と「うつ」の二つがある。この二つはともに下二段動詞で意味もほとんど同じで発音もきわめて近い。したがって、本来は「すつ」だけだったものがある音環境では「すつ」の先頭の「s」音が「発音の省力化作用」のため省略されて「うつ」になった可能性がある。日本語の姉妹言語である琉球方言には「すつ」に対応する「シティーン」（那覇方言）、「シティールン」（今帰仁方言）、「シテュン」（与論方言）、「シティルン、シティン」（石垣方言）しかないこともこのことを裏付けているように思われる。

次に、万葉集におけるもう一つの「てて」の例について検討しよう。それは大伴家持の「<sup>やから</sup>族<sup>ごと</sup>を諭しし歌一首」と題する4465番歌の中に登場する「語り次てて」という句である。この歌は大伴家持が、「大伴」という氏は天孫降臨以来天皇家の側近として仕えてきた高潔な氏名であり、氏名を汚すようなことは決してするな、と大伴一族を諭す内容の歌である。この歌の後半部分と大意を新日本古典文学大系本によって以下に示す（[14]、pp. 461-464）。

20/4465 … <sup>あか</sup>明き心を <sup>すめらへ</sup>皇<sup>み</sup>に 極め尽くして 仕へ来る <sup>おや</sup>祖の <sup>つかさ</sup>職と 言立てて 授けたまへる  
<sup>うみのこ</sup>子孫の いや継ぎ継ぎに 見る人の <sup>つぎ</sup>語り次てて（可多里都藝<sup>かた</sup>弓<sup>かみ</sup>氏）聞く人の <sup>かがみ</sup>鑑にせむを あたら  
 しき 清きその名そ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる ま  
 すらをの伴

【大意】「… 忠誠心を皇室に示し尽くして、仕えて来た先祖以来の役目である」と明言して授け給うた、その子孫たちが次々と伝えて、見る人が語り継ぎ、聞く人が模範にするだろうよ。貴重で高潔な

名であるぞ。いい加減に心に思って、かりそめにも先祖の名を絶つな、大伴氏の名を負っているますらおたちよ。

この歌の「語り次てて」の文法構成は、もし「てて」を「とて」の原形だと認めるならば、「語り継ぐ」という動詞の連用形「語り継ぎ」が名詞化されたものに「てて」が付いたものと考えることができる。この場合、その前後の四句「見る人の 語り次てて 聞く人の 鑑にせむを」の意味は次のように文脈にぴったり合ったものとなる。

…見る人が、(これこれがお前たちへの)「語り継ぎ」だよと言って(次の世代に語り継ぎ)、(それを)聞く人が、(語り継がれた内容を)鑑にしようとするものを…

このような解釈に対して、従来の解釈はどのようなものだったのだろうか。以下に、代表的な万葉集注釈書の現代語訳と注釈から「語り次てて」の関連部分のみを抽出して示す。

#### ①新日本古典文学大系<sup>[14]</sup>

【現代語訳】(見る人が)語り継ぎ

【注釈】語り次てて—「つぎつ」は下二段動詞。順序よく語って。

#### ②新編日本古典文学全集<sup>[15]</sup>

【現代語訳】(目に見た人が)ほめ称え

【注釈】語り次てて—ツギツは順序立てて並べる意の下二段動詞。ここは特別に高く評価する意に用いたのであろう。

#### ③講談社文庫(中西進)<sup>[16]</sup>

【現代語訳】(見る人が)語りつぎ

【注釈】語りつぎてて—「つぎて」は「つぎつ」(秩序立てる意)の連用形という。

#### ④万葉集注釈(澤瀉久孝)<sup>[17]</sup>

【現代語訳】(見る人が)語り継ぎ

【注釈】語りつぎてて—古典大系本に「順序を立てて語って。ツギテはツギツの連用形。ツギツは順序立てる、秩序立てる意」とあるによるべきだろう。

#### ⑤日本古典文学大系<sup>[18]</sup>

【現代語訳】(見る人は)次々に語りつたえ

【注釈】語りつぎてて—順序を立てて語って。ツギテはツギツの連用形。ツギツは、順序立てる、秩序立てる意。ツイデはツギテの名詞形。秩序。tugite → tuide。

上に示した五つの注釈書はすべて「語り次てて」を解釈するために「順序立てる」という意味の「つぎつ」という下二段動詞の存在を「想定」している。前に述べた「うちうつ」の縮約形「うつつ」の場合と同じやり方である。しかし「つぎつ」という動詞はこの歌を除けば上代語としてほかに例がなく「時代別



国語大辞典 上代編」にも掲載されてない。岩波古語辞典は連用形の見出し語「つぎて【序】」を掲載し、「ツイデの古形」とした上で「順序立てる。秩序立てる」と説明しているが、その用例には今の万葉集4465番歌が一例示されているのみである（[13]、p. 872）。すなわち「つぎつ」という動詞は、万葉集4465番歌の「語り次てて」を「順序立てて語り継いで」という意味に解釈するためだけに想定された異例な動詞だと言える。この動詞が異例であることはその活用形を見てもよくわかる。もし通説が言うように「つぎつ」という下二段動詞が存在したならば、その活用形は次のようになるはずである。

つぎて（ず）、つぎて（たり）、つぎつ、つぎつる（事）、つぎつれ（ば）、つぎてよ

一見して、否定形の「つぎてず」（順序立てない）や完了形の「つぎてたり」（順序立てた）は日本語としてきわめて不自然な語であり、このような語が本当に上代に存在したか大いに疑問である。

このように、もし「てて」を「とて」の原形とする立場をとらなければ、4465番歌の「語り次てて」はきわめて異例な「つぎつ」という動詞の存在を想定しない限り説明がつかない。また先に示した897番歌の「うつてては」についても同様で、「うつつ」のような異例な動詞の存在を想定しなければ説明がつかない。しかし、もし「てて」を「とて」の原形だと認めるならば、このような異例な動詞「つぎつ」や「うつつ」を想定する必要はまったくなくなるのである。

#### 4. おわりに

この論文では、万葉集2005番歌の第四句「然叙手而在」を従来のような誤字説によらず「しかぞてである」と素直に訓み、この句の中の「てて」を平安時代以降にしばしば登場する「とて」（「～と言って」の意）の原形だとする解釈を提案した。このような解釈により、2005番歌の「てて」と同じ用法の「てて」がほかにも二例（897番歌と4465番歌）存在することが明らかとなり、またこの二例を解釈する際にも従来のような異例な動詞「うつつ」や「つぎつ」を想定する必要がなくなることが示された。さらに、奈良時代から平安時代への「言葉の連続性」という観点から見ても、万葉集の「てて」を平安時代以降の「とて」の原形と見るのが自然であろう。最後に、本論文で提案された考え方が妥当なものであるかどうか多くの方々のご批判をおおぎたい。

#### 参考文献

- [1] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 467、2000年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 77、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（二）」、中西進、講談社文庫、p. 341、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 224-225、1962年。
- [5] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 88-89、1960年。
- [6] 竹生政資・西見央、万葉集1996番歌の「水左閨而照」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第14集第1号、pp. 115-123、2009年。
- [7] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
- [8] 「万葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 520-522、1999年。
- [9] 「万葉集②」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 89-90、1995年。
- [10] 「万葉集 原文付全訳注（一）」、中西進、講談社文庫、pp. 420-421、1978年。
- [11] 「万葉集 二」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 116-117、1959年。
- [12] 「万葉集注釋 卷第五」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 292-298、1959年。
- [13] 「岩波古語辞典 補訂版」、岩波書店、1990年。

- 
- [14] 「萬葉集 四」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 461-464、2003年。
- [15] 「萬葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 438-440、1996年。
- [16] 「万葉集 原文付全訳注 (四)」、中西進、講談社文庫、pp. 342-344、1983年。
- [17] 「萬葉集注釋 卷第廿」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 204-209、1968年。
- [18] 「萬葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 459-461、1962年。